

自然農法に関する御教え

(一) 自然農法の原理

自然農法の根本は、土そのものを生かす事である。土を生かすという事は、土壤に人為肥料の如き不純物を用いずどこ迄も清浄を保つのである。そうすれば土壤は邪魔物がないから、本来の性能を充分発揮し得る。

(栄七九)

自然農法の原理は飽迄 土を尊び、土を愛し、汚さないようにする事である。そうすれば土は満足し、喜んで活動するのは当然である。人間でいえば障害を受けないから澆刺たる健康者となるようなものである。

(栄一六)

(三)

火水 土の三原素が農作物を生育させる原動力としたら、
日当りをよくし、水を充分 供給し、
淨土に栽培するとすれば、今迄にない 大きな成果を挙げ
得る事は確かである。 (栄七九)

すべて如何なるものでも、その用途というのは 神様が決
めてあるのです。それを人間が人間の智慧で外のところに
使うというその事が非常に不自然なのです。反自然です。
だから一時は良くても結局駄目になります。そういう事の
解釈がみんな違うのです。これは唯物科学の間違いです。
そういう様なわけで、根本を知ればいいのです。

だから土というものは、米を育てるために神様が作られ
たのだから、そのままでやればいいわけです。それをいろ

んな物を入れるという事は、それだけ 土を穢すという事になります。という事は 邪魔をする事になります。

土が働くとするのを働かせない様にして、とれない様にするのですから、これほど間違った事はありません。

(教十九・四七)

(二) 土について

抑々 土とは造物主が人畜を養う為に、作物を生産すべく
造られたものである以上、

土其ものの本質は肥料分があり余る程で、言わば 肥料の
塊 といつてもいい位のものである。 (栄一四一)

抑々太初 造物主が人間を造るや、人間を養うに足るだけの食物を生産すべく造られたものが土であるから、それに種子を播けば芽を出し、茎、葉、花、実というよう漸次発育して、芽出度く 稔りの秋を迎える事になるのである。してみれば この米を 生産する土こそ素晴らしい技術者であり、大いに 優遇すべきが 本当ではなかろうか。勿論これが自然力であるから、この研究こそ科学の課題でなくてはならない筈である。

(栄二四五)

本来土と言うものは、靈と体との二要素から成立つてゐるもので、体とは 土 其もので、靈とは目には見えないが、土の本体である。

(栄一四一)

土を尊び土を愛する事によつて、土自体の性能は充分 発揮される。それには何よりも土を汚さず、より 清淨にする事であつて、これによつて土は喜びの感情が湧き 活発となるのは言う迄もない。

(栄一四五)

作物を作れば作る程土は良くなる。人間で言えば働けば働く程健康を増すのと同様で、休ませる程弱るのである。

(栄七九)

土壤は作物の種類によつて、其作物に適応すべき性能が自然に出来る。

(栄七九)

肥毒のない清浄な土で稻なら稻を作ると、土の方で稻に適するような成分がわいて来るのです。それは実際神秘な話です。

そこで年々土自体に特種な性能ができ、その性能がだんだん発達してゆくのです。ですから素晴しく良い土になつてゆくのです。という事は素晴しく肥が効いた土になるのです。肥と言つても今までの肥とは違つて、

良い意味のもので、つまり神様の作つた肥で、それが増えてゆくのです。

(教二七・三六)

(III) 自然力について

この自然力とは何であるかと云ふと、これこそ日、月、
土、即ち火素、水素、土素の融合によつて発生した× 即ち
自然力である。そうしてこの地球の中心は、人も知る如く
火の塊であつて、これが地熱の発生原である。この地熱の
精が地殻を透して成層圏までの空間を充填しており、この
精にも靈と体の二面があつて体の方は科学でいう窒素であ
り、靈の方は 未発見である。それと共に、太陽から放射
される精が火素で、これにも靈と体があり、体は 光と熱
であり、靈は未発見である。又 月から放射される精は水
素で、体は 凡ゆる 水であり、靈は未発見である。

と云ふように この三者の未発見である靈が 抱合 一
体となつて生まれたものが×である。これによつて一切万
有は生成化育されるのであって、この×こそ無にして有で

あり、万物の生命力の根原もある。従つて農作物の生育と雖も、この力によるのであるから、この力こそ無限の肥料である。故にこれを認めて土を愛し、土を尊重してこそ、その性能は驚く程強化されるので、これが眞の農法であつて、これ以外に農法はあり得ないのである。故にこの方法を実行する事によつて、問題は根本的に解決されるのである。

(栄一一四五)